

水に浮かぶことができるようになったのは、中学一年生の夏休みであった。葉山の久留和海岸で、海水浴をしていた時のことである。それまでは水が怖く、とくに足の立たないところでは溺れまいとして体に力が入り、かえってずぶずぶと沈む有様であった。

ふと思いたって、比較的浅いところで、体の力を抜いて水に体をあずけるようにしてみた。すると、浮くではないか。おそろおそろ目を開けると、照りつける日差しがまぶしく、耳元で海水がびちゃびちゃと音をたてていた。うれしかった。懐かしい夏の日の記憶である。

海の思い出はそれだけではない。数年前の冬に、房総半島の勝浦を訪ねた。ドライブの途中、「海中展望塔」の表示があったので、見学してみることにした。ごつごつした岩の水路から、セメントで固めた通路が海に延びているそこを歩いて、円筒形の建物の中に入り、階段を下りてゆく。すると、海面下の幾分広い空間に出、十五ほどの丸い窓からは、水中の魚の様子が観察できるのだった。

悠然と泳ぐ鯛、窓に向かってくる四角い顔をしたふぐ、斜め上のほうに頼りなげに流されていくイカの赤ちゃん。見飽きることがなかった。四十分ほど海の中の生き生きとした世界を楽しみ、海の上に戻ってきた。外では、雨がいつしか雪になり、海は鉛色に寒々としていた。同じ海であるのに、海中と海の上とはこんなに違うのだ。

様々なこととらわれてあくせくし、本質的でないことに依存して、かえって自分を見失っている時、力を抜いて委ねることがいかに大切であるか。また視点を変えたとき、同じものを見ながら、これまでとは違う情景が目の前に姿を現す。そんなことに気づかせてくれたのは、海である。海の贈り物といつてよいであろう。

図書館を利用すること～基礎ゼミアルバイトを体験して～

アドヴァンスト・コース 岡野 那美子

満開の桜に祝福されて、今年も新入生がやってきた。私は今年もまた、新入生の前に立ち、大学一の迷路である図書館を案内した。緊張した初々しい新入生たちは、この図書館の所蔵量や見たこともない楽譜に驚き、益々元気になるグループもいれば、「こんな楽譜も読まなければならぬのか」と勉強への不安からため息をするグループもいる。毎年、私はどうだったっけ?と思う。

私の大学4年間は、図書館内部と深くかわわって来た。1・2年は書庫から資料を取り出しカウンターまで届ける配架、3・4年は基礎ゼミの図書館案内のアルバイトをしてきた。特に配架は大変で、上から下まで書庫を走り回り、カウンターに届けていた。何故走るのかというと資料の取り出しを担当する学生とパートの方達全員が、「この資料を待っている人に早く届けたい、この資料で熱心に学んでほしい」という気持ちで動いているからである。この図書館は、検索こそweb管理だが、後はほぼ人力で、館内で配架や管理をしている方の学生への熱い思いで動いているのだ。私は学生が検索した資料を見つけて届ける為に一生懸命働いてくださっている方の存在を基礎ゼミの案内の際にしっかりと伝えて、常に感謝と謙虚な気持ちで、「お願いします」「ありがとうございます」と挨拶をしようと新入生に伝えるようにしている。

ただ資料を出すだけでなく、こんなにも素早く一生懸命に私たちへ資料を届けてくださったり、貸し出し以外にも予約資料が返却されたり、延滞するとすぐはがきが届くのはどうしてなのか。それは、この資料を学ぶ材料にして、大きく育っていく学生の姿を見ることが好きだから。私たち学生は、様々な方に支えられて勉強させていたいただいているのである。その方達の期待に添えるような音楽人になれるよう、新入生には目一杯図書館を利用してほしい。